

傷む八月

亀沢

傷む八月

亀沢深雪作品集

風媒社

〔著者紹介〕

亀沢深雪 (かめざわ みゆき)

1928年、広島市生まれ。17歳のとき爆心地から1.3キロの自宅で母ヒデさんと一緒に被爆。すぐ下の妹は全身赤むけに焼けただれ、引きちぎった人形のように無残な姿で死に、15年後の8月6日に母も原爆症で死んだ。戦後、父の転勤で桑名市へ。22年6月、突然、左足がふくれあがり、骨髄骨膜炎で足首を手術、以後10年間の闘病生活が続いた。この間、被爆を隠し続けたが、結婚話でわかり破談。被爆17年目に後遺症でまた病状が悪化、医者に見放される。しかし奇跡的に回復、以来、「生き残ったものの使命として」被爆体験にもとづいたテーマを主にした創作活動にとりくむ。金城学院英文科卒。現在、愛知県図書館勤務、愛知県原水爆被災者の会理事。

現住所 名古屋市千種区2-63 電話(052)781-6945

傷む八月

1976年8月6日 第1刷発行

著者 亀沢深雪

発行者 稲垣喜代志

発行所 名古屋市中区上前津2-9-14 久野ビル 風媒社
電話052-331-0008 振替・名古屋5616

*乱丁・落丁本はお取替えいたします。

*ニホン美術印刷 *飯島製本

0093-2008-7302

目次

ガラスの女

1

風花

57

傷む八月

第一話

ピカキチの唄

109

第二話

天逝

135

第三話

命をかえせ

161

臨時工

189

問題児

245

石の眩き

301

永代寺男

353

あとがき

ガ
ラ
ス
の
女

私は勤め帰りに、ふらりと立ち寄った書店で、ある一冊の青春月刊雑誌に目をとめた。青春雑誌といえば、殆どが人気スターのゴシップや猥雑な記事を、そのトップに掲げているのに比べて、それはあまりにもみずばらしい装丁で、書店の片隅に、僅か二三冊程度しか置かれていなかった。私は特別に、その雑誌を探していたわけではなかったが、何気なく手にした表紙の、「特集・被爆者の手記『一人生き残って』』というのが、私の目を引いた。

私は原爆について、過去に特別な関わりを持っていた。八月六日が来るたびに、というより、原爆という字や言葉に接するたびに、それらが一種異様な不協和音を発し、耳底から脳裡に突き刺さった。私は被爆者ではなかったが、私の青春の忘れがたい思い出が、あたかもケロイドを持つ被爆者のように、私をこの世の片隅に、ひっそりと息を殺させ、夏の眠れぬ夜のように、私の胸を息苦しいままにうちひしぐのであった。

私は雑誌を手にしてしばらくと頁をめくり、手記を見た。その瞬間、電光が私の軀を走った。私は生唾を呑みこみ、思わず手にしていた雑誌を伏せてしまったほどだ。筆名は、『山中好子』となっていたが、最近の筆者として掲載された写真は、まぎれもない奈津子であった。痩せた顔を無理に笑って頬を硬ばらせているのが、かえってその顔を歪んで見せた。ちょうどピカソが描いた女のように、泣いているようでもあり、また笑っているようでもあった。私は慌ててその雑誌を買うと、書店を出た。

奈津子は生きていた。その感慨を、私は号外配りのように、その雑誌を高く掲げて絶叫しながら、歩道を行きつめた。だれかに知らせたい、このまま胸におさめておくには惜しい、そんな感涙に咽びながら、歩道を喘いだ。息苦しさは喉元を締め、軀にじっとりと脂汗が滲んで来た。私の足許は、宙を泳ぐように乱れ、胸のどよめきは拡大し、私の心臓を押し潰すかに思えた。私はもはや、これ以上歩くことにも苦痛を感じ、通りすがりの喫茶店で、しばらく休息せねばならなかった。

私は運ばれた水を、女店員が呆れるのをよそに、一気に飲み干すと、やや平静をとり戻し、ようやく冷たい飲み物を注文した。店内の冷房と水とで、幾分落ち着いた私は、奈津子が生きていたことを、無上の歓びに感じると同時に、その実感が、彼女に対するいとおしさとなって、私の体内に渦巻いて来た。私はその雑誌を胸に抱くようにして、手記を読んだ。頁にして、僅か四頁ほどのものであったが、それはこれまでの手記一般と違い、憐れみを乞うところはなく、原爆に対する怒りと、戦争への憎悪で綴られていた。そしていまもお強いられる生活苦を訴え、被爆者の悲運な宿命ともいふべき、偏見や差別、病苦、貧困を嘆き、二度と起こらぬよう、原水爆の禁止を強く訴えていた。それは主義思想を持たない、体験した者だけの悲痛な叫びであった。

手記は、△原水禁運動Vについて、「一年に一度、八月六日が来ればやるというものではない。お祭りではないからだ。いつ、どこでも、原水爆の反対を叫べばならない」といい、また、「核実験は地下ならいい、太平洋ならいい、砂漠ならいいというものではない。核そのものがいけないのだ」と、涙ながらの訴えであった。

私は胸を抉られる思いがした。戦争の罪過も遠いあなたに消え、ともするとつかしい思い出に変わろうとしている現在、また原水禁運動が分裂し、イデオロギーの論争になっている現在、奈津子の手記は、私を強く叱責し、私というより、日本人全体の背信を鋭く戒めていた。私は襟を正した。そ

して壮嚴な、敬虔な祈りにも似た感謝を捧げずにはいられなかった。私は甘んじて叱責されよう。奈津子は生きていたのだ。しかもこんなことが言える女になって――

帰りの電車の中でも、私は手記を読み続けた。そして奈津子の生きていたことが、陶醉するほどの快感となって、私の軀を駆け巡った。

実際、このごろになっても、まだ奈津子を忘れることができないでいた。以前に比べれば、幾分薄らいだにせよ、奈津子は私の忘れ得ぬ人であった。だが別れて十年もたてば、思い出してみても、仄かな幻影にしかすぎず、私の青春時代の甘い思い出となって、さながら悲恋映画の一齣のように、若い私と少女奈津子とが、見渡す限りの原子広野を真っ赤に染める夕焼けの中に立つ虚像であったり、また美しい少女奈津子が、風に黒髪をなびかせ、薄い絹の服を風に翻して、ちょうど天使がかなたの空へ消えていくような、ファンタジックな光景が、私の胸に広がるのであった。

妻が、「今日は暑かったわね」と労いながら、私の上着をとり、風呂が沸いている旨を告げた。

私は、妻の顔をまともに見ることができず、「風呂より先に、めしだ」と言い、冷たいビールで喉を潤した。

妻は先ほどの雑誌を手にして、「あなた、こんなものをお読みになるの」と呆れた口調で尋ねた。私はなにか後ろめたいものを感じながら、「いや、別に」と答えた。

妻はばらばらとそれをめくると、膳の上に置き、表紙を見た。

「あら、被爆者の手記があるから買ったのね。あなたって、変ね」妻は箸をとった。「八月号になれば、どの雑誌でも載せるわ。でもあたし、嫌いよ」

「なにが」思わず、私は言った。

「なにがって、この手記がよ」

「読んでもいないのに、いい加減なことを言うな」

「読まなくてもわかっているわ。大がいの涙頂戴ものよ。被爆者を売り物にしてるのよ」

私は危く、持っていたコップを投げつけるところであった。私の異常な反応に、妻は気づいたらしく、口をつぐんでしまった。私が原爆に対して、特別の関心を示すのを、妻は知っていた。私は黙ってコップを傾け、妻は箸を動かした。いくら飲んでも、苦いだけで少しも酔えず、妻への怒りは消えなかった。

妻はそのうち、甲高い声で世間話を、わざと陽気に喋りはじめた。無口な私は、いつも聞き役であったが、この日は、それが耳を刺す。わざと陽気に装うのが、白じらしくみえ、おどけた田舎芝居を見ているようで、不快でならなかった。そして私の心を暗くした。

「やかましいな。少し静かにしないか」と私の荒荒しい声に、妻は肩をすくめ、「あなた、ほんとに今日は変よ」と言った。

私はそれまで、時折り讒の中を探るように思っていた奈津子が、はっきりと浮かび上がり、前に坐っている妻とすり替わるのであった。

床についても、私は雑誌を離さなかった。最近の筆者という写真は、印刷は不鮮明であったが、明らかに奈津子である。川らしいものを背景に、割烹着をつけ髪を後ろで束ねて、眩しうに目を細め、口許だけをほころばせていた。生活のやつれが、その引きつった口許に見え、首は瘦せて細くみえた。私の奈津子はいつまでも少女であったが、実際はこんなになっているのに驚異を感じ、改めて時の流れの早さを痛感した。奈津子は一人なのだろうか。どんな生活環境の中にいるのだろうか。この写真から見ると、仮にも豊かとはいえない。私は長い間眠り続けていた奈津子への思慕が、俄かに目覚めて寝つくことができず、そのまま床を離れ、机に向かった。そして出版社に、『山中好子』の住

所を問い合わせる葉書を書いた。私は胸が大きく脹らむのを感じた。会ってみよう、奈津子に。どんな生活の中にも、奈津子は奈津子だ。たとえだれのものになっていようと、奈津子は私のものだ——

隣室から妻の鼻にかかった声が、そそるように聞こえて来るのを、私はうるさく感じた。

岩国の航空隊を、毛布と食糧品、それに身の回り品をリュックにつめて出て来たのは、二十年の九月の終わりであった。私は広島に立ち寄ろうと思った。ぜひこの目で、その惨状を確かめたい——そう願ったからだ。

八月六日、火焰が天に昇るのを見た。それはあたかも飛竜の如く、凄まじい轟音と閃光を伴い、暗黒色と茜色に染まった、巨大な焰雲であった。隊の中が異様にざわめいた。いろいろな流言がとんだ。時がたつにつれて、その流言は幾重にも波紋を描いていったが、その夕方、広島からの罹災民によって、その真相が告げられた。広島壊滅、広島崩壊、それが真相であった。

私は足許が揺らぐのを感じた。彼らは一人として満足な姿はなく、着ているものは、つづれのように破れ、手足の皮まで裂けて、見るも無惨な姿であった。血糊で硬ばった顔を歪めて、彼らは惨状を話した。

新聞やラジオは、△新型爆弾Vと報じた。岩国からも救援隊が出た。そのだれもが、まるで死人のように、腑抜けて帰って来た。彼らは口ぐちに恐怖を語った。ぼろのように束ねて焼いてもつきぬ屍、川という川は死体で埋まり、橋の上にも折り重なり、手のほどこしやうがないと——私は自分まで腑抜けていくのを感じた。そして、戦争もおしまいだと思った。

私はそれまで、戦争で死ぬことを、無上の歓びとしていた。一機一艦の信念に燃え、死の苦痛など

全く感じず、玉のように碎けるのだと信じ、死は美しいと思っていた。だが、折り重なる屍や宙を擲む死体に、なんの美があろう。どうしてそれが、国のためになるのだろうか。これまで生きて来て、ただのむくろになって、なんの意義があろう。私は煩悶した。それまで殆ど、信仰のように迎合していた忠君愛国の精神が、俄かに徒党をなして崩れていった。

戦争は敗けた。私は命拾いをしたと素直に思うことができたのは、忠君愛国の精神が消えてしまったからかも知れない。仲間の中には、怒り狂うものもいたが、私はむしろこうなるべきだと思った。日本中を広島のようにしてまで、殺し合わねばならぬ理由は、どこにもないはずだ。十九歳の私に聞かせてくれた広島の惨事が、私の目を大きく見開き、思想まで変えてしまった。私はその広島へ立ち寄りたかった。

私は広島に降りた。かつて中国地方一を誇った市は、むろん面影はなかったが、痛痛しいまでに灰燼に帰っていた。私はまず駅頭に立って、しばし呆然とした。話にも聞いていたし想像もしていたが、これほどとは思わなかった。その荒廃ぶりは、それらを遙かに越えていた。駅の構内には、異様な風態の人びとが躊り、駅前広場にも、種じゆ雑多な人びとがうごめき奔めき合っていた。ひろひろのバラックがそこに立ち、灰燼の街は目の届く限り、遠く広く続いていた。私は改めて、その被害の甚大なのに仰天した。これまでも休暇のときなど、広島に遊ぶのを唯一の楽しみにしていただけに、その変貌にただ呆れるばかりであった。私は歩を進めた。電車路を伝い、無限に広がる瓦礫の街を歩いた。行き交う人びとは、殆どが負傷者であり、身内を求めて喘ぐ被爆者や復員兵であった。かつて洋式建築を誇った産業奨励館のドームが、骨をむき出し、橋の欄干は一方だけが倒れて残っていた。死の街広島、黒く焦げた大地、焼け爛れた残骸、すべては虚しい戦争の生けにえなのだ。私が馳せた戦争は、こんな形しか残さなかったのか。私はこの戦争に、命を賭けていたのを愚

かしく感じながら、無性に腹が立つのをおさえることができなかった。私は川に映る骨だけのドームを見て、再びこの川が、屍で埋まらないよう、戦争など決して起こらぬよう、願わずにはいられなかった。

私は橋を渡り、橋を渡った。そしてまた橋を、広島は川の街だ。大きな川がゆうゆうと市の中を流れ潤っていた。子供たちは、その川で遊び育った。貝を拾う人や魚を釣る人の姿も、珍しくなかった。人びとは川に馴染み親しんだ。しかしその川に魚が住み、人びとが貝を拾うのは、いつのことだろう。

そして、いくつ目の橋だったろうか、私は三人の男たちに囲まれた、一人の少女を見た。少女は貧しい身なりで、ワンピースとは名ばかり、ずだ袋みたいに大きく、履きちぎった下駄と埃まみれの足から、少女の身の上を知ることができた。髪はお下げにしていた。少女は目を、深い湖のように潤ませ、なにかを必死に訴えていた。男たちの険しい目が、執拗に少女の身にまつわりついた。少女はもがきながら、ふと涙の目を私に向けた。少女の湖の目が、その瞬間、私に危ないと思わせた。ちょうど美しい薄いガラスの器が滑り落ちるときのように、私は息を呑んだ。そしてとっさに、その中に掻きわけて入ったのである。私は少女を背に、男たちの前に立ちはだかった。

「お前はだれなら」「いらんことをするな」「邪魔をすると、おどれから先に片づけるぞ」男たちは口ぐちに、悪口雑言を言い放った。

「うちはなんにもせんのに、言いがかりをつけて。この人たちを見たのは、はじめてじゃに、うちがこの人たちのところを逃げた言うてんじゃけん。うちはそんなことは知らんのに」

少女は泣きじゃくっていた。腕が細く、顔色もわるかったが、色の白い、露に濡れた草のような目をした、美しい少女であった。

「こんな、わしらのところを逃げたんじゃ」男の一人が言った。「親がない言うもんじゃけん、親切にしてやりや、つけあがりやがって」

「君たち、この人はなんにもせん、知らんと言ってるじゃないか。わからんのか」私は胸を張って言った。

「なにを、生意気な。この青二才」先ほどの男がつめ寄って来た。「いまはな、そんな特攻帰りで、恐ろしくないぞ」

周囲に人びとがたかって来たが、ただ遠巻きにして、私たちを見守るだけであつた。私は胸が高鳴り、足が硬ばるのを意識しながら、この狼のような男たちに、どう対処すべきか困惑した。私の背中に少女の怯えが伝わり、私に勇気を促した。

「文句があるんなら言うてみい、この馬鹿たれ」

頭ごなしに浴びせられる雑言に、私は顔色を変えた。そのとき、群集の一人が大声で叫んだ。

「警察の人じゃ、巡査さんじゃ」

男たちは竦んだ。そしてやにわに、後ろも見ず負け犬のように逃げ去った。最後の凄味に比べて、その逃げ足は意気地なくもまた、素早いものであつた。私は腋の下に、びっしり汗をかいていた。あの一言がなかったら、どうなっていただろう。私は肩から力が抜けるのを感じた。

「危なかったな、気をつけんさいよ。この辺にや、あんとなごろつきがうろろしとるけん。の、ねえちゃん」先ほど私たちを救ってくれた男が言った。「ピカがみんなを狂わしたんじゃ。わしも一人になってしもうて、探すあてもないんじゃ。あんたらも早う行きんさい」

私は深く一礼して、その場を去った。少女も礼を言うのと、私のあとについて来た。少女は言った。

「ありがとうございます。ほんまにどうなるかと思いました。電車に乗ろうと思って、あそこに立

つとつたら、急に囲まれて」

「ほかの人は助けてくれなかったの」

「恐ろしいけん、黙っとるんです。ほんまに、ありがとう」

私は少女と肩を並べて歩いた。少女は身の上を語った。彼女の家は左官町で、機械工具店を営んでいた。家族は五人、両親と姉二人であった。両親と上の姉は、家にいたので助からなかった。なにしろ爆心地だったから。下の姉は勤め先で死んだ。少女は吉島の工場へ勤労働員に行っていて助かったが、このごろでは、なんのために一人生き残ったのか、かえって情けないと言うのであった。

彼女は名を、『相川奈津子』といい、年は十六歳、まだ学校へ行かねばならないが、そんなことはできない。一人で生きていかねばならないからと言って、薄く汚れた顔を淋しくほころばせた。私が、△親戚は▽と訊くと、△全部死んだの▽と答えた。私は驚いて、△一人くらい生きていてもいいのに▽と言うと、△ほんまに、そう思います▽と、再び淋しい笑いを浮かべた。

私は、はじめて会った少女に、不思議な親しみを感じるのを不審に思いながら、奈津子のすすめにしたがい、彼女が収容されているという小学校へ行った。その講堂が収容所に当てられていた。それは宇品というところにあり、広島でも、焼失は免がれていたが、焼け残ったというだけで、窓は壊れ、瓦はとび、壁は崩れていて、おおよそ人の住める場所ではなかった。広い床には、筵が敷いてあり、まだ無数の人びとが蹲っていた。異様な臭気が立ちこめ、九月の終わりだというのに、群がる蠅、私は嘔気をおさえながら、奈津子にしたがった。

そこの一隅が、彼女の住み家になっていた。これから寒くなるというのに、破れた窓辺に、すり切れた毛布と薄いワンピースしか持たない奈津子が、私は可哀そうでならなかった。可哀そうといえ、奈津子の隣の老母は、皺だらけの顔を涙で濡らし、△今日で二日も、息子がものを言わない▽

と、私に訴えた。まだ青年だという病人は、髪は抜け、頬はこけて落ち、斑点が皮膚を地図模様で描き、むっとするような臭気を放って、年齢のほどは定めにくかった。目を半ば閉じ、薄く開いた唇は、すでに色あせていた。私は原爆症というのを聞いていたが、はじめて目の前に見て、戦慄した。岩国で救援に出た戦友たちが、次次死んでいった事実を思い合わせ、行き場のない岩角に追いあげられた思いがした。そして少女を、こんなところに置いておけない——そう思ったのである。広い床に蹲る人びとの中で、満足な姿をしたものは一人もいない。奈津子の話では、一人二人と、毎日死んでいくとか、私はそこでも、戦争の無情を痛感した。

私はこの日、はじめて彼女に会っただけに、胸がつかまるような、説明しがたい感情が渦巻くのを、哀れな奈津子のせいだと気づくと、恥ずかしくてならず、照れ隠しに自分の持っていた毛布や食糧品、それに身の回り品まで差し出した。

奈津子は米や罐詰に目を丸くして、「そんなことをして貰うたらいけません。お礼をせにやいけんのは、あたしの方だから」と、当惑しながら言った。

「いいんだよ。ぼくは家に帰ればいいし、それに重いんだよ。汽車が満員だら、軀一つの方が楽なんだ」

私はわざと笑って見せた。奈津子もその笑いにつられた。目が鈴のように張って、長い睫毛が、それに影を落としていた。薄汚れた少女から、冷たい朝の空気のような清さがしさを感じたのは、恐らくその瞳のせいだろう。とにかく清水のように澄んでいて美しい。私は心が洗われる思いであった。私は飯盒でめしを炊き、奈津子と食べた。奈津子は、へあたたかいご飯は久しぶりだ／＼と、頬を輝かせた。

その夜は、そこですごした。冷たい夜気が広い講堂に漲った。秋も半ばともなれば、夜は寒い。固

い床と高い天井とが、余計に寒さを加えているように思えた。奈津子はすり切れた毛布をすっぽりとかぶり、子猫のように丸くなって眠っていた。八月六日以前に、こんな生活を想像したことがあっただろうか。この少女の生活を狂わせたのが、なぜか私の責任のような気がした。私は起きあがり、自分の毛布を奈津子に着せた。私は静まりかえった広い講堂の中で、坐って朝を待った。

午前二時を少し過ぎていた。私は隣の青年の呼吸の乱れに気づいた。人間の臨終には、吸う息だけになると聞いていたので、はっとしてその手足に触れてみた。四肢はすでに死んで、僅かに心臓が、鈍くその名残りを留めていたが、やがてそれも消えようとしていた。私は老母を揺り起こした。疲れ切った老母はなかなか起きず、そのうち青年は、がばつとまるで空気を食べるような呼吸を最後に、その鼓動をとめた。やっと起きあがった老母は、すでにこと切れた我が子を見ても、涙も出ぬ有様であった。

「これでやっと、行くところへ行くんじゃないね。成仏しんさいよ」と、老母は言っただけであった。青年は唇をかすかに開き、目を半分あけていた。私はハンカチを取り出し、その目を閉じて顔にかけた。そしてその冷たい手を組んでやった。老母は私の仕種に、涙を流した。

翌日、私は広島をたった。奈津子はわざわざ駅まで送りに来た。私は粗末なバラック食堂で、奈津子とうどんを食べた。奈津子は、入あるところにはあるものねと、まるで久しぶりのご馳走のように目を睜った。私はその様子を見て、胸がつまった。そして言ったのである。入迎えに来るVと――奈津子は信じられぬものを聞いたときのように目を瞬かせると、「ほんと」と、首を傾げた。

私は力強く頷いてみせ、「決して悪に染まらないよう、自分を大切に。しばらくの辛抱だから」と、まるで兄貴のような口調で言った。

奈津子は目頭をおさえると、やや安堵した面持ちで答えた。「ありがとう、親切な人ね」